

「忠臣蔵」には、塩にまつわる葛藤があった？

真相にせまる！ 塩ミステリー 第2話

2023年12月 浜松塩業株式会社

「忠臣蔵」は、江戸時代の元禄年間起きた赤穂事件を題材とし、人形浄瑠璃や歌舞伎の演目として発展し、一時は年末の時代劇スペシャルで取り上げられた人気創作です。赤穂と吉良は、いずれも塩田開発で有名な場所であり、1982年に放送されたNHKの大河ドラマ「峠の群像」(堺屋太一原作)では、製塩にまつわる両者の対立があったとされています。しかし、その真相は謎に包まれています。今回の話は、吉良、赤穂での塩作りが赤穂事件の遺恨の原因になったのか？ というミステリーの真相解明に向けて、さまざまな角度からレビューしてみたいと思います。

■赤穂事件とは？

赤穂事件とは、元禄14年3月14日(1701年4月21日)江戸城 本丸御殿の大広間から白書院へつながる松之大廊下(まつのおおろうか)にて、赤穂藩 藩主 浅野内匠頭(あさのたくみのかみ)が高家 吉良上野介(きらこうずけのすけ)に小さ刀で切りつけたという刃傷事件に至ったことから端を発する事件のことである。事件当時、江戸城では幕府が朝廷の使者を接待している真っ最中だった。時の将軍は徳川綱吉で、場所柄をわきまえずに刃傷事件を起こした内匠頭は即日切腹、浅野家は領地没収、改易となったが、上野介はお咎めなしとなった。その後、浅野家筆頭家老の大石内蔵助が浅野家再興を模索するものの、努力むなしく浅野家再興の道が閉ざされ、47人の赤穂藩の浪人(四十七士)と共に、翌年元禄15年12月14日(1703年1月30日)に吉良邸に討ち入りし上野介の首を討ち取った までの一連の事件である。

■吉良上野介と浅野内匠頭の関係

当時、吉良上野介は、高家筆頭であり朝廷からの使者を接待する勅使饗応役を指南する役目に付いていた。高家とは江戸幕府における儀式や典礼を司る役職で、将軍家直参の旗本が務めることになっていた。一方、当時、浅野内匠頭は、朝廷からの使者を江戸城で接待する2度目の勅使饗応役に付いており、吉良上野介に典礼指南される立場にあった。

勅使饗応役は、5~10万石の大名が命じられる役目で、典礼にかかる費用の一切を藩で負担する必要があること、家中をあげての準備が大変であるとされていた。内匠頭にとっては、負担の大きさに対する不満に加えて、さらに指南役の吉良の指示を受けることも大きなストレスになっていたとされている。

(遺恨の原因の謎)

浅野内匠頭がなぜ吉良上野介に刃を向けるに至ったか？については諸説あるが、はっきりしたことはわかっていない。ドラマの上では、概ね、内匠頭が上野介に要求された賄賂を渡さなかったためさまざまな嫌がらせをされたことが原因となっている。

一方、塩田にまつわるのが遠因にあったという説もある。当時、入浜式塩田で先進的な赤穂での製塩法の指導を上野介が内匠頭をお願いしたが断られた。そのはらいせとして、上野介の典礼指導役の立場を利用して、饗応役である内匠頭に人前にて恥をかかせたというものである。

当時、赤穂藩では鹵磨き用焼塩の開発に成功し、将軍綱吉にも献上した。これがきっかけで江戸を中心に、従来より赤穂塩が広まった可能性がある。それまで、高品質塩で名が通っていた吉良の饗庭塩(あいばじお)の立場からすると、競争相手の台頭に対して複雑な気持ちであった可能性が高い。真相は謎である。